

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：34526

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13898

研究課題名（和文）音楽の祝祭化と地域振興のジレンマ

研究課題名（英文）The dilemma of music festivization and community development

研究代表者

永井 純一（Nagai, Junichi）

関西国際大学・現代社会学部・准教授

研究者番号：90552828

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「芸術文化の祝祭化」という観点から音楽フェスティバルの地域社会における役割や存在意義を、主催者、関係者ならびに地域住民へのインタビュー調査によって明らかにすることを目的として実施された。質的調査と量的調査の結果として、研究期間中に学会報告5本、論文4本を発表した。他の芸術文化とは異なる、民間の取り組みとして行われるポピュラー音楽の祝祭ならではの課題を浮き彫りにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究期間中に新型インフルエンザのパンデミックが起こったことは、本研究の対象である音楽フェスの開催そのものを揺るがす大きな出来事であった。研究開始当初は「音楽フェスは地域振興に関して期待されつつも、地域社会との相互理解が及ばず、十分なポテンシャルを発揮できていないのではないか」という見立てのもと研究を開始したが、コロナ禍においてのバッティングはある意味でこの仮説を裏付けるものであった。しかし、そのことで却って社会的関心が高まった側面もある。その結果、研究会や学会での報告や、マスメディア等でのエビデンスに基づく情報発信の機会を多く得ることができ、研究成果のアウトプットを通じた社会貢献できたといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the role and significance of music festivals in local communities from the viewpoint of "the festivization of arts and culture" through interviews with the organizers, related parties, and local residents. As a result of the qualitative and quantitative research, five conference reports and four articles were published during the research period. The research has highlighted issues that are unique to popular music festivals, which are different from other art and culture festivals and are conducted as a private initiative.

研究分野：社会学

キーワード：音楽フェスティバル ライブ 祝祭 地域振興 関係人口 交流人口

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、「文化芸術の祝祭化」は社会にどのような影響を与えているのかという関心のもと、対象をポピュラー音楽のフェスティバル(以下音楽フェスまたはフェス)と地域振興に絞り、課題探索的研究として調査を開始した。

近年、文化芸術領域において、芸術祭や映画祭などのフェスティバルが数多く開催されるようになった。こうした現象は欧米等では「文化の祝祭化 (festivalization of culture)」と呼ばれ、経済学、社会学、観光学、地理学等を中心に学術的研究が先駆的におこなわれていた。

国内での文化芸術の祝祭化の背景には、「文化芸術振興基本法」(2001年)の制定があり、文化芸術の祝祭化は、地域おこしや地域振興の文脈で注目を集めた。イベントによる地域の魅力創発や経済効果が期待されたのである。こうした文化政策の潮流を考慮し、同法は2018年に改正がなされた。

しかし、日本国内におけるこの分野の学術的研究や調査は盛んだとはいえ、芸術祭やアートフェスティバルについてはいくつかの先行研究を除いて、客観的な分析や実証的なアウトプットは乏しい状況であった。とりわけポピュラー音楽のフェスティバルは開催数が多く、国内だけで1年間に全国で約500個の音楽フェスがあると推計されるにも関わらず、学術的研究に関しては皆無に等しく、諸外国の後塵を拝している。また、こうした状況を反映してか、関係者においても音楽フェスと地域振興に関する議論が熟しておらず、情報やノウハウが共有されていない状況であった。

### 2. 研究の目的

本研究が目的とすることは、海外の学術的研究動向を参照しつつ、定性調査・定量調査を通じて国内の音楽フェス状況を把握し、日本におけるこの分野の学術的研究の基礎を築くことである。その独自性は、数ある文化芸術のなかで音楽、とりわけ民俗音楽や芸術音楽ではなくポピュラー音楽の祝祭とその関係者を対象とし、それらを地域社会の文脈で理解することにある。

多くが民間事業としておこなわれる音楽フェスは、「行政や住民との連携が十分ではなく、地域振興におけるポテンシャルが十分に発揮されていないケースが多いのではないか」という見立てのもと、課題探索的に調査を行い、他の芸術文化とは異なる、音楽ならではの展望や課題を明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

定性調査と定量調査の両面からのアプローチによって、多角的に状況を把握し、課題発見につとめた。

定性調査では、すでに開催実績のある音楽フェスの関係者へのインタビュー調査によって、実施体制や主催者の意識、音楽フェスの目的の変化、音楽フェスと地域振興の課題を明らかにすることをめざした。さらに文献調査により、海外の状況を把握するとともに、分析枠組みの精査を行なった。

定量調査としてはウェブ上のアーカイブ情報を元にデータベースを作成し、音楽フェスの地理的な分布や開催時期、参加者の移動性や越境性を考慮し、基礎的な情報の収集につとめたほか、主催者を対象にしたものと、オーディエンスを対象にした2つの質問紙調査をおこなった。

### 4. 研究成果

主な研究成果は以下のようなものがあげられる。

#### (1) 主催者調査

音楽フェスの主催者や関係者を対象に、時期によって目的の異なる2種類のインタビューとひとつのアンケート調査を実施した。

研究の初期段階においては、後述する主催者を対象とした質問紙調査の基礎となる予備調査として、課題探索的なインタビュー調査をおこなった。これをふまえて、主催者を対象としたアンケート調査を2021年に実施した。調査はメール等を通じて依頼し、許諾を得られた協力者を対象に、ウェブを利用しておこなった。その後、主催者調査のフォローアップとして、運営体制(ボランティア含む)や地域社会との関係について、インタビューをおこなった。

一連の調査を経て得た主な知見には以下のようなものがある。

国や行政との関係については、多くの音楽フェスが「国や省庁」、「都道府県」、「市区町村」のいずれかと連絡をとっており、3つのうちのいずれとも連携していないものは全体の14.0%であった。そのうち、「しっかり連携している」との回答がもっとも多かったのは「市区町村」であった。これは、会場の管理者との兼ね合いが影響している。その他の公的機関については6割が「保健所」、「消防署」、「警察」と連絡をとっており、そのうち3割程度は「しっかり連携している」と回答した。

音楽フェスの開催にあたっての経済的な支援については「企業からの協賛金」、「市民・個人・商店・個人団体からの寄付や協賛金」と上位2つが民間によるものであった。なお2019年以前

の開催において何らかの助成金や補助金を受けたことがあると回答した音楽フェスはのべ38.6%であり、市区町村のものをもっとも多く28.1%であった。

人的支援や協力体制については「ボランティアや実行委員など人的支援」は民間団体が48.2%、行政をはじめとする公的な機関が33.3%で民間の方が多い結果となった。その他には民間では「物やサービスを無償で提供してもらった」、「アーティストまたはクリエイターの技術支援」といったサービスやスキルに関するもの、公的機関では「警備や安全確保の為、指導または支援」、「イベントに対する評価やアドバイス」といった指導やアドバイスに関するものが高い数値となっている。

音楽フェスがどのように地域社会に貢献しているのかについて、自己評価を尋ねたところ、多くの項目で肯定的な回答が寄せられた。「地域のイメージアップ」、「移動、宿泊に伴う経済の活性化」、「商店や飲食店など地域経済の活性化」といった観光や経済波及効果に関する項目が特に高い数値となり、いずれも「貢献している」と「どちらかといえば貢献している」の合計が9割を上回っている。次いで「その地域を繰り返し訪れる人の増加」、「地元の人の地域への愛着を高める」、「地元の業者を使うなど雇用を生み出している」といった地域振興に関する項目が続く。

関係人口の増加は、インタビュー調査において、行政関係者をはじめ多くのインフォーマントが口にする課題であった。後述のオーディエンス調査においても、参加者が同じ土地を繰り返し訪れることでその土地に愛着を持つ傾向にあることが確認できており、音楽フェスは関係人口の増加や地域のイメージアップに一定の貢献を果たしているといえる。その他には、市民の表現の場や地域団体や企業のPRの場として機能していることがうかがえる。

一方で、「移住者の増加」、「地域の新規出店や個人事業主の開業に貢献」など長期的な影響に関する項目は比較的低い数値となっており、「わからない・意識したことがない」が多い結果となった。

## (2) フェスティバル・ゴアーを対象とした行動・意識調査

ライブのオーディエンスを対象に、ライブや音楽フェスに関する質問紙調査を実施した。研究開始当初は計画になかったが、コロナ禍におけるライブ・フェスシーズンの窮状に際し、問題意識を共有する日本ポピュラー音楽学会有志とともに共同調査をおこなった。調査は2020年4月21日～5月5日と2020年11月13日～20日の2回にわたってウェブ上でおこなった。

調査によって主な知見には以下のようなものがある。

フェスティバル・ゴアー（festival goer—フェスに行く人）は20～40代が中心となっており、性別に関しては大きな偏りはない。自己意識や社会意識についても、際立った特徴はみられなかった。ただし、普段からよくライブに通っており、外に出かけることが好きで遠隔地のライブにも行くなど活動的であり、アーティストや音楽フェスへの寄付や支援も積極的におこなっている真摯な音楽ファンであることは確認された。

彼/彼女らのフェス観について、フェスにおける音楽はラインナップとして認識し全体のテイストを重視しているほか、会場の雰囲気など音楽以外にも注意を払い、複眼的な評価軸を持っていることが明らかになった。

一方で、こうしたオーディエンス像は結局のところ、コアな音楽ファンを想起させてしまうのも事実であり、こうした「ハードルの高さ」が新規参加者の妨げとなっている可能性がある。

音楽フェスで訪れる場所や地域については「フェスで行った地域で、なるべくお金を使うようにしている」と答えた回答者は6割程度であるのに対し、「フェスで行った地域に愛着を持つことがある」と答えた回答者は約8割であった。音楽フェスは地域振興については一定の貢献をしているといえる。

## (3) 開催状況に関するデータベース作成

音楽フェスサイトのアーカイブ情報を利用し、1997年から2019年までの間に開催が確認できた合計816個のフェス、延べ公演数は3515回の開催状況に関するデータベースを作成した。

分析の結果、音楽フェスは2000年以降一貫して増加傾向にあり、2010年代前半に爆発的に増加したこと、2010年代後半には継続的なものとしてのフェスが定着したこと、その転換点は2012年であることなどが明らかになった。

2007年からコロナ前の2019年までの間に、1年のうちに新しく立ち上がったフェスの平均は57.8個であり、2012年が最多（99個）であった。2016年以降は総数のうち新規の占める割合は徐々に低くなっており、2019年は最少の23個であった。

その一方で継続的なフェスは増えており2019年におこなわれたフェスの平均開催回数は6.9回（中央値6）であり、50.4%のフェスが5回以上の開催実績があった。

なお816個の平均開催回数は4.3回であった。これらのなかで1回しか開催されなかったフェスは317個であり、全体の38.8%を占めている。最頻値（最も多い開催回数）が1、中央値（データのちょうど中間にあたる）が2であることを考えると、1回目と2回目、3回目と4回目の間に壁があるように思われる。ちなみに4回以上開催できたフェスは全体の31.7%（307個）となっており、短命に終わるか長期的に開催されるかに2局化している。

なお、このデータベースは暫定的なものであり、随時更新していく必要がある。

以上に加えて、文献調査により海外の研究動向を把握し、体系的な理解を深めることができた。

さらに継続的な参与観察により、コロナ禍の影響(開催の可否、コロナ等感染症対策の実施状況、社会規範との折衝など)を具に知ることができたことは、研究成果をまとめる上できわめて重要であったといえる。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計4件)

永井純一、「洋楽離れはいつ起こったのか 分水嶺としての2007年仮説」、『神戸山手大学紀要』 査読無、(21)、2019:107-114  
八木寛之・永井純一、「ライブハウスのイメージに関する量的研究—兵庫県下における質問紙調査をもとに—」、『関西国際大学研究紀要』 査読有、(23) 2022:269-283  
永井純一、「音楽フェスティバルと行政：主催者を対象とした質問紙調査をもとに」、『関西国際大学研究紀要』 査読有、(23) 2022:317-324  
永井純一、「ブルースと日本のロック」、『関西国際大学研究紀要』 査読有、(24) 2023:151-158

### 〔学会発表〕(計5件)

宮入恭平、永井純一、吉光正絵、遠藤英樹、澤田聖也、葛西周、「ミュージックツーリズム「音楽と観光」の関係を再検討する」、日本ポピュラー音楽学会第31回大会、2019  
南田勝也、木島由晶、永井純一、平石貴士、毛利嘉孝(東京藝術大学)、「ライブゴアーに対する定量調査(中間発表)」日本ポピュラー音楽学会2020年度第1回オンライン例会、2020  
南田勝也、木島由晶、永井純一、平石貴士、「ライブゴアーとはどのような人々か：計2回のウェブ統計調査をもとに」日本ポピュラー音楽学会第32回大会、2020  
永井純一、「音楽フェスティバルと行政・地域社会 主催者を対象とした質問票調査をもとに」第94回日本社会学会大会、2021  
南出涉、大原智、高岡智子、中條千晴、永井純一、「シンポジウム：音楽ライブの公共性」JASPM33 日本ポピュラー音楽学会第33回年次大会、2021

### 〔図書〕(計5件)

永井純一、花伝社、「フジロック、洋邦の対峙」、南田勝也編著『私たちは洋楽とどう向き合ってきたのか 日本ポピュラー音楽の洋楽受容史』2019、210-243  
南田勝也、木島由晶、永井純一、小川博司編著、新曜社、『音楽化社会の現在 統計データで読むポピュラー音楽』2019、202  
南田勝也・木島由晶・永井純一・平石貴士編著、日本ポピュラー音楽学会、『コロナ禍のライブをめぐる調査レポート[聴衆・観客編]』、2021、124  
永井純一、春風社、「音楽フェスティバル」、横浜国立大学都市科学部『都市科学事典』、2021、656-657  
永井純一、「音楽フェス」、ミネルヴァ書房、須藤廣・遠藤英樹・高岡文章・松本健太郎編著、『よくわかる観光コミュニケーション論』、2022、64-65  
永井純一、「場所」永富真梨・忠聡太・日高良祐編著、フィルムアート社、『クリティカル・ワード ポピュラー音楽 聴く を広げる・更新する』、2023、151-158

### 〔産業財産権〕

出願なし

### 〔その他〕(計6件)

ポストコロナ時代のフェスはどうなる？フェスが社会のためにできること(2020.6.16)  
<https://www.festival-life.com/78594>  
音楽フェスは地元の宝。市長と教授とローカルフェスの明るい話をしよう(2021.11.14)  
<https://www.festival-life.com/88022>  
フェスと地域社会の関係 | 音楽フェスと密接な関係にあるのは都道府県か市区町村(2022.3.6)  
<https://www.festival-life.com/90494>  
フェスと地域社会の関係 | フェスはどことつながっているのか(2022.5.18)  
<https://www.festival-life.com/93417>  
フェスと地域社会の関係 | フェスが地域社会から受ける支援(2022.8.22)  
<https://www.festival-life.com/97927>  
フェスと地域社会の関係 | フェスの地域貢献について(2022.9.29)  
<https://www.festival-life.com/99918>

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 永井純一	4. 巻 23
2. 論文標題 音楽フェスティバルと行政：主催者を対象とした質問紙調査をもとに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西国際大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 317-324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八木寛之・永井純一	4. 巻 23
2. 論文標題 ライブハウスのイメージに関する量的研究：兵庫県下における質問紙調査をもとに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西国際大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 269-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永井純一	4. 巻 21
2. 論文標題 洋楽離れはいつ起こったのか 分水嶺としての2007年仮説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸山手大学紀要	6. 最初と最後の頁 107-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 永井純一
2. 発表標題 音楽フェスティバルと行政・地域社会 主催者を対象とした質問票調査をもとに
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 南出渉・大原智・高岡智子・中條千晴・永井純一
2. 発表標題 音楽ライブの公共性
3. 学会等名 JASPM33 日本ポピュラー音楽学会第33回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永井純一
2. 発表標題 ライブゴアーと真面目な聴衆
3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会2020年度第1回オンライン例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 永井純一
2. 発表標題 フェスティバルゴアーとはどのような人々か   ライブゴアーとのちがい
3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第32回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮入恭平・永井純一・吉光正絵・澤田聖也・遠藤英樹・葛西周
2. 発表標題 ミュージックツーリズム 「音楽と観光」の関係を 再 検討する
3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第31回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 南田勝也・永井純一・柴那典
2. 発表標題 最近、洋楽って聴いてますか？
3. 学会等名 『私たちは洋楽とどう向き合ってきたのか』（花伝社）刊行記念イベント
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 津田昌太郎・三船雅也・永井純一
2. 発表標題 THE WORLD FESTIVAL GUIDE
3. 学会等名 One music camp（音楽フェス）トークセッション
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 永富真梨、忠聡太、日高良祐	4. 発行年 2023年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 264
3. 書名 クリティカル・ワード ポピュラー音楽	

1. 著者名 須藤廣，遠藤英樹，高岡文章，松本健太郎編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 よくわかる観光コミュニケーション論	

1. 著者名 南田勝也, 木島由晶, 永井純一, 平石貴士	4. 発行年 2022年
2. 出版社 NextPublishing Authors Press	5. 総ページ数 124
3. 書名 コロナ禍のライブをめぐる調査レポート [聴衆・観客編]	

1. 著者名 横浜国立大学都市科学部	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 1052
3. 書名 都市科学事典	

1. 著者名 南田 勝也、木島 由晶、永井 純一、小川 博司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 202
3. 書名 音楽化社会の現在	

1. 著者名 南田勝也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 花伝社	5. 総ページ数 310
3. 書名 私たちは洋楽とどう向き合ってきたのか	

〔産業財産権〕



〔その他〕

結果速報：日本ポピュラー音楽学会 ライブゴアーに対する意識調査  
<https://covid19.jaspm.jp/archives/450>  
 2020年度第一回オンライン例会 ライブゴアーに対する意識調査（中間発表）  
<https://covid19.jaspm.jp/archives/1654>  
 ポストコロナ時代のフェスはどうか？フェスが社会のためにできること  
<https://anchor.fm/festivaljunkie/episodes/15-ef6n2a/a-a2e0hcf>  
 音楽フェスからジェンダーを考えてみよう  
<https://anchor.fm/festivaljunkie/episodes/56-1-emo5i/a-a3t01e1>  
 日本のフェスファッションとマナーは独特？  
<https://anchor.fm/festivaljunkie/episodes/57-2-emo7ms/a-a3tr4df>  
 音楽フェスは地元の宝。市長と教授とローカルフェスの明るい話をしよう(2021.11.14)  
<https://www.festival-life.com/88022>  
 フェスと地域社会の関係 | 音楽フェスと密接な関係にあるのは都道府県か市区町村(2022.3.6)  
<https://www.festival-life.com/90494>  
 フェスと地域社会の関係 | フェスはどことつながっているのか(2022.5.18)  
<https://www.festival-life.com/93417>  
 フェスと地域社会の関係 | フェスが地域社会から受ける支援(2022.8.22)  
<https://www.festival-life.com/97927>  
 フェスと地域社会の関係 | フェスの地域貢献について(2022.9.29)  
<https://www.festival-life.com/99918>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------